

■ 研究所だより

相良 孝雄

協同総合研究所では、12月3日(土)の協同総合研究所25周年記念集会に向けて、継続的な研究会や準備を急ピッチで進めています。その準備過程で今までの協同の発見誌の特集テーマや研究会の中身を振り返っていたときに、先人たちが切り拓いてきた研究成果と当時の社会情勢をつなぎながら、「協同労働の協同組合運動」がさらに発展するための礎の一部を協同総合研究所が作ってきたことを感じました。その中でも、菅野正純さんのレポートの数々は、今日の協同労働の協同組合運動の理論的支柱をつくっていると考えています。

私は、2005年からワーカーズコープで働き、現在12年目を迎えますが、その中でもこのような人になりたいと思った方の一人に、元協同総研理事長・元労協連理事長の菅野正純さんの存在があります。菅野さんとゆっくり話す機会に恵まれたのは、2005年のイタリア社会的協同組合調査のときでした。それがきっかけとなり本部でお会いし、話をするなかで、ここまで実直に研究する菅野さんの姿に憧れる自分がいつしかいました。

菅野さんがまとめられていた協同の発見誌上のレポートでは、先進的な海外情報や困難な社会的課題について丁寧にまとめ、自らの論を展開させながら、それを日本の労働者協同組合運動に実践的に活かす取り組みを势力的に行っていました。特にイタリアなどの社会的協同組合や労働者協同組

合の調査報告、北海道夕張市の財政破綻を契機に、協同労働がこの危機にどう立ち向かうのかを果敢に挑戦されている姿は今でも、目に焼き付いています。

菅野さんと話すなかで、一番印象に残っていることは、「何時に起きて勉強されていますか」とお聞きすると、「朝4時ごろ起き、イタリア語の勉強や論文を読んでいるよ。この研究は必要だと思っている」と笑顔で話されたことです。そのときに愛と情熱をもって労働者協同組合運動をしている人だと感じました。

菅野さんがお亡くなりになったあと、協同の発見誌2008年3月号(188号)には菅野さんへの追悼文が掲載しています。その際、私自身は菅野さんが私に話されたことを以下のような文書で残していました。

「いくつになっても、協同組合運動への想いを持っている。歳をとっても今からでも2～3年ほど、イタリアに行って研究できたらおもしろいね。特に、イタリア、レガコープの社会的協同組合の運動についての歴史と社会的な意味を考えたい。ノーマライズされた社会的コミュニティをつくるために協同組合をつくりたい」

「相良くんは、大学時代から協同組合の実践と研究をしている。若い人にとって、協同組合の理念に触れた上で仕事をしたいということはまだまだ少ない。その意味で

も、労協や協同組合運動全体に対して、『協同組合の意味や価値』を同世代の人に話してほしい。若い人にとって労協で働くことはまだまだ困難さがある。しかし、先人の仲間が苦労して現在までの実践を切り拓いてきた。相良くんはまだまだ若い。日本だけではなく、世界から、そして日々の実践からも多く学び、考え、仲間とともに頑張っしてほしい」

30代後半となり、私は菅野さんにどれだけ近づいているのだろうか。言っていた中身について、どれだけ実践できているのか。菅野さんが描いた未来の労働者協同組合はどういう社会的な意味を見出して

いたのか。25年史で歴史を振り返れば振り返るほど、いつもその疑問にぶつかっています。

数多くの諸先輩方がつくってきた土台の上に、今の協同総合研究所があることを実感しています。その先輩方の想いや研究成果から学び、未来の協同総研の展望を見い出せる契機として、25周年記念集会を開催したいと強く思っています。

12月3日に470名以上の会員の皆さんとともに、協同総合研究所が25年を迎えられることを嬉しく思っています。当日の集会には多くの方にご参集いただくことをお願い致します。